銀鼎

泉鏡太郎

青空文庫

一

汽車は寂しかつた。

わが友なる――園が、自から私に話した――其のお話をするのに、念のため時間表を繰つて見ると、奥州白河に着いたのは夜の十二時二十四分で――

上野を立つたのが六時半である。

五月の上旬……とは言ふが、まだ梅雨には入らない。けれども、ともすると卯の花くだしと称うる長雨の降る頃を、分けて其年は陽気が不順で、毎日じめ〳〵と雨が続いた。然も其の日は、午前の中、爪皮の高足駄、外套、雫の垂る蛇目傘、聞くも濡々としたありさまで、（まだ四十には間があるのに、壮くして世を辞した）香川と云ふ或素封家の婿であつた、此も一人の友人の、谷中天王寺に於ける其の葬を送つたのである。

園は予定のかへられない都合があつた。で、矢張り当日、志した奥州路に旅するのに、一旦引返して、はきものを替へて、洋杖と、唯一つバスケツトを持つて出直したのであるが、俥で行く途中も、袖はしめやかで、上野へ着いた時も、轅棒をトンと下ろされても、あの東京の式台へ低い下駄では出られない。泥濘と言へば、まるで沼で、構内まで、どろ〳〵と流込むで、其処等一面の群集も薄暗く皆雨に悄れて居た。

「出口の方へ着けて見ませう。」

「然う、何うぞ然うしておくれ。」

さてやがて乗込むのに、硝子窓を横目で見ながら、例のぞろ〳〵と押揉むで行くのが、平常ほどは誰も元気がなさゝうで、従つて然まで混雑もしない。列車は、おやと思ふほど何処までも長々と列なつたが、此は後半部が桐生行に当てられたものであつた。

室はがらりと透いて、それでも七八人は乗組んだらう。女気なし、縦にも横にも自由に居られる。

と思ふうちに、最う茶の外套を着たまゝ、ごろりと仰向けに成つた旅客があつた。

汽車は志す人をのせて、陸奥をさして下り行く――早や暮れかゝる日暮里のあたり、森の下闇に、遅桜の散るかと見たのは、夕靄の空が葉に刻まれてちら〳〵と映るのであつた。

田端で停車した時、園は立上つて、其の夕靄にぽつと包まれた、雨の中なる町の方に向つて、一寸会釈した。

更めてくどくは言ふまい。其処には、今日告別式を済ました香川の家がある。と同時に一昨年の冬、衣絵さん、婿君のために若奥様であつた、美しい夫人がはかなくなつて居る……新仏は、夫人の三年目に、おなじ肺結核で死去したのであるが……

園は、実は其の人たちの、まだ結婚しない以前から衣絵さんを知つて居た……と言ふよりも知られて居たと言つて可からう。

園は従兄弟に、幸流の小鼓打がある。其の役者を通じてゞある。が、興行の折の桟敷、又は従兄弟の住居で、顔も合はせれば、ものを言ひ交はす、時々と言ふほどでもないが、ともに田端の家を訪れた事もあつて、人目に着くよりは親しかつた……

親しかつたうへに、お嬢さん……後の香川夫人は、園のつくる歌の愛人であつた。園は其の作家なのである。

「行つて参りますよ。」

と、其処で心で言つた。

汽車が出る。

がた〳〵と揺れるので、よろけながら腰を据ゑた。

恁の如く、がらあきの席であるから、下へも置かず、席に取つた——旅に馴れないしるしには、真新いのが見すぼらしいバスケツトの中に、——お嬢さん衣絵の頃の、彼に（おくりもの）が秘めてある。

二

今は紀念と成つた。

友染の切に、白羽二重の裏をかさねて、紫の紐で口を縷つた、衣絵さんが手縫の服紗袋に包んで、園に贈つた、白く輝く小鍋である。

彼は銀の鼎と言ふ……

組込の三脚に乗る錫の鑵に、結晶した酒精の詰まつたのが添つて、此は普通汽車中で湯を沸かす器である。

道中——旅行の憂慮は、むかしから水がはりだと言ふ。……それを、人が聞くと可笑いほど気にするのであるから、行先々の停車場で売る、お茶は沸いて居る、と言つても安心しない。要心を通越した臆病な処へ、渇くのは空腹にまさる切なさで、一つは其がためにもつい出億劫がるのが癖で。

「……はる／〳〵＼＼奥の細道とさへ言ふ。奥州路などは分けて水が悪いに違ひない。ものを較べるのは恐縮だけれど、むかし西行でも芭蕉でも、皆彼処では腹を疼めた——惟ふに、小児の時から武者絵では誰もお馴染の、八幡太郎義家が、龍頭の兜、緋縅の鎧で、奥州合戦の時、弓杖で炎天の火を吐く巌を裂いて、玉なす清水をほとばしらせて、渇に喘ぐ一軍を救つたと言ふのは、蓋し名将の事だから、今の所謂軍事衛生を心得て、悪水を禁じた反対の意味に相違ない。」

と、今度の旅の前にも……私たちに真面目で言つた。

何を、馬鹿な。

と平生から嘲るものは嘲るが、心優しい衣絵さんは、それでも気の毒がつて、存分に沸かして飲むやうにと言つた厚情なのであつた。

機会もなくつて、それから久しぶりの旅に、はじめてバスケツトに納めたのである。

「さあ、来い、川も濁れ、水も淀め。」

と何か、美い魔法で、水を澄ませて従へさへ出来さうに、銀鍋の何となくバスケツトの裡に透く光を、友染のつゝみにうけて、袖に月影を映すかと思ふ、それも、思へばしめやかであつた。

窓の外は雨が降る、降る。

雪駄、傘、下駄、足駄。

幸手、栗橋、古河、間々田……の昔の語呂合を思ひ出す。

武左な客には芸しやがこまる。

芝の浦にも名所がござる。

ゐなか侍茶店にあぐら。

死なざやむまい三味線枕。

「鰻の丼は売切です。」

「ぢやあ弁当だ」

小山は夜で暗かつた。

嘗て衣絵さんが、婿君とこゝを通つて、鰻を試みたと言ふのを聞いて居たので、園は、自分好きではないが、御飯だけもと思つたのに、最う其は売切れた……

「そら行け。」

どんと後で突く、

「がつたん〳〵。」

と挨拶する。こゝで列車が半分づゝに胴中から分れたのである。

又づしんと響いた。

乗つて来るものは一人もなし、下りた客も居なかつたが、園は急に又寂い気がした。

行先は尚ほ暗い。

開くでもなしに、弁当を熟々視ると、彼処の、あの上包に描いた、ばら〳〵蘆に澪標、小舟の舳にかんてらを灯して、頬被したお爺の漁る状を、ぼやりと一絵具淡く刷いて描いたのが、其のまゝ窓の外の景色に見える。

雨は小留もない。

た※渺々として果もない暗夜の裡に、雨水の薄白いのが、鰻の腹のやうに畝つて、淀んだ静な波が、どろ〳〵と来て線路を浸して居さうにさへ思はれる。

ほたり〳〵と落ちて、ずるりと硝子窓に流るゝ雫は、鰌の覗く気勢である。

三

バスケツトを引揚げて、底へ一寸手を当てゝ見た。雨気が浸通つて、友染が濡れもしさうだつたからである。

そんな事は決してない。

が、小人数とは言へ、他に人がなかつたら、此の友染の袖をのせて、唯二人で真暗の水に漾ふ思がしたらう。

宇都宮へ着いてさへ、船に乗つた心地がした。

改札口には、雨に灰色した薄ぼやけた旅客の形が、もや〳〵と押重つたかと思ふと、宿引の手手の提灯に黒く成つて、停車場前の広場に乱れて、筋を流す灯の中へ、しよぼ〳〵と皆消えて行く。

……其の中で、山高が突立ち、背広が肩を張つたのは、皆同室の客で、こゝで園と最う一人——上野を出ると其れ切寝たまゝの茶の外套氏ばかりを残して、尽く〳〵下車したのである。

まことに寂い汽車であつた。

やがて大那須野の原の暗を、沈々として深く且つ大な穴へ沈むが如く過ぎて行く。

野川で鰌を突くのであらう。何処かで、かんてらの火が一つ、ぽつと小さく赤かつた。火は水に影を重ねたが、八重撫子の風情はない。……一つ家の鬼が通るらしい。

黒磯——

左斜の其の茶の外套氏の鼾にも黒気が立つた。

燈も暗い。

野も山も、此の果しなき雨夜の中へ、ふと窓を開けて、此の銀の鍋を翳したら、きらりと半輪の月と成つて二三尺照らすであらう。

……実際、ふと那様な気がしたのであつた。が、其は衣絵さんが生きて居て、翳すのに、其の袖口がほんのり燃えて、白い手の艶が添はねば不可い……

自分が遣ると狐の尻尾だ。

と独で苦笑する。其のうちに、何故か、バスケツトを開けて、鍋を出して、窓へ衝と照らして見たくてならない。指さきがむづ痒い。

こんな時は魔が唆かして、狂人じみた業をさせて、此を奪はうとするのかも知れぬ。

園は悚然として、道祖神を心に念じた。

真個、この暫時の間は稀有であつた。

郡山まで行くと……宵がへりがして、汽車もパツと明く成つた。思見る、磐梯山の煙は、雲を染めて、暗は尚ほ蓬々しけれど、大なる猪苗代の湖に映つて、遠く若松の都が窺はれて、其の底に、東山温泉の媚いた窓々の燈の紅を流すのが遥々と覗かれる。

園が曾遊の地であつた。

バスケツトの中も何となく賑かである。

と次第に遠い里へ、祭礼に誘はれるやうな気がして、少しうと〳〵として、二本松と聞いては、其処の並木を、飛脚が通つて居さうな夢心地に成つた。

茶の外套氏が大欠伸をして起きた。口髯も茶色をした、日に焼けた人物で、ズボンを踏み開けて、どつかと居直つて、

「あゝゝ、寝たぞ。」

と又欠伸をして、

「何の辺まで来たかなあ。」

殆ど独言だつたが、しかし言掛けられたやうでもあるから、

「失礼——今しがた二本松を越したやうです。」

と園が言つた。

「や、それは又馬鹿に早いですな。」

と驚いた顔をして、ちよつきをがつくりと前屈みに、肱を蟹の手に鯱子張らせて、金時計を撓めながら、

「……十一時十五分。」

と鼻筋をしかめて、園を真正面に見て耳に当てた。

「留つては居らんなあ。はてなあ、此の汽車は十二時二十四分に、漸く白河へ着きをるですがな。」

と硝子に吸着いたやうに窓を覗く。

園も、一驚を吃して時計を見た。針は相違なく十一時の其処をさして、汽車の馳せつゝあるまゝにセコンドを刻むで居る。

バスケツトを圧へて、吻と息して、

「何うも済みません、少し、うと〳〵しましたつけ。うつかり夢でも視たやうで、——郡山までは一度行つた事があるものですから……」

園も窓を覗きながら、

「しかし、何うも済みません、第一見た事もありませんのに、奥州二本松と云ふのは、昔話や何かで耳について居たものですから、夢現に最う其処を通つたやうに思つたんです。」

燈が白く、ちら〳〵と窓を流れた。

「白坂だ、白坂だ。」

と茶の外套氏が言つた。……向直つて口を開けたが、笑ひもしないで落着いた顔して、

「此の汽車は、豊原と此処を抜くですで……今度が漸く白河です。」

「何うもお恥かしい……狐に魅まれましたやうです。」

「いや、汽車の中は大丈夫——所謂白河夜船ですな。」

園は俯向いたが、

「――何方まで。」

「はあ、北海道へは始終往復をするですが、今度は樺太まで行くですて。」

「それは、何うも御遠方……」

彼の持ふるした鞄を見よ。手摺の靄が一面に、浸の形が樺太の図に浮ぶ。汽車は白河へ着いたのであつた。

四

「牛乳、牛乳――牛乳はないのか。――夜中に成ると無精をしをるな。」

茶の外套氏は、ぽく〳〵と立つて、ガタンと扉を開いて出た。

窓を開けると、氷を目に注ぐばかり、颯と雨が冷い。恰も墨を敷いたやうなプラツトホームは、ざあ〳〵と、さながら水が流れるやうで、がく〳〵こう〳〵と鳴く蛙の声が、町も、山も、田も一斉に波打つ如く、夜ふけの暗中に鳴拡がる。声は雲まで敷くやうであつた。

ト、すぐ裏に田が見えて、雨脚も其処へ、どう〳〵と強く落ちて、濁つた水がほの白い。停車場の一方の端を取つて、構内の出はづれの処に、火の番小屋をからくりで見せるやうな硝子窓の小店があつて、ふう〳〵白い湯気が其の窓へ吹出しては、燈に淡く濃く、ぼた〳〵と軒を打つ雨の雫に打たれては又消える。と湯気の中に、ビール、正宗の瓶の、棚に直と並んだのが、むら〳〵と見えたり、消えたりする。……横手の油障子に、御酒、蕎麦、饂飩と読まれた……

若い駅員が二人、真黒な形で、店前に立つたのが、見え隠れする湯気を嬲るやうに、湯気がまた調戯ふやうに、二人互違ひに、覗込むだり、胸を衝と開いたり、顔を背けたり、頤を突出したりすると、それ、湯気は立つたり伏つたり、釦に掛つたり、耳を巻いたり、鼻を吹いたりする。……其の毎に、銀杏返の黒い頭が、縦横に激しく振れて、まん円い顔のふら〳〵と忙しく廻るのが、大な影法師に成つて、障子に映る……

で、駅は唯水の中のやうである。雨は冷く流れて降りしきる。

駅員の一人は、帽子とゝもに、黒い頸窪ばかりだが、向ふに居て、此方に横顔を見せた方は、衣兜に両手を入れたなり、目を細め、口を開けた、声はしないで、あゝ、笑つてると思ふのが、もの静かで、且つ沁々寂しい。

其の一人が、高足を打つて、踏んで、澄してプラツトホームを横ざまに歩行出すと、いま笑つたのが掻込むやうに胸へ丼を取つた。湯気がふつと分れて、饂飩がする〳〵と箸で伸びる。

其の肩越に、田のへりを、雪が装上るやうに、且つ雫さへしと〳〵と……此の時判然と見えたのは、咲きむらがつた真白な卯の花である。

雨に誘はれて影も白し、蛙は其の饂飩食ふ駅員の靴の下にも鳴く。

声が、声が

「かあ、かあ、
白あ河あ。
かあ、かあ、
買へ、かへ、
うどん買へ、買へ。

しらあ、河あ。」と鳴く。

あゝ風情とも、甘味さうとも——園は乗出して、銀杏返の影法師の一寸静つたのを呼ぼうとした。

順礼がとぼ〳〵と一人出た。

薄い髪の、かじかんだお盥結びで、襟へ手拭を巻いて居る、……汚い笈摺ばかりを背にして、白木綿の脚絆、褄端折して、草鞋穿なのが、ずつと身を退いて、トあとびしやりをした駅員のあとへ、しよんぼりと立つて、饂飩へ顔を突込むだ。——青膨れの、額の抜上つたのを視ると、南無三宝、眉毛がない、……はまだ仔細ない。が、小鼻の両傍から頤へかけて、口のまはりを、ぐしやりと輪取つて、瘡だか、火傷だか、赤爛れにべつたりと爛れて居た。

其の口へ、——忽ちがつちりと音のするまで、丼を当てると、舌なめずりをした前歯が、穴に抜けて、上下おはぐろの冗まだら。……

湯気を揺つて、肩も手もぶる〳〵と震へて掻食ふ。

「あ。」

あゝ、あの丼は可恐しい。

無論こんな事は、めつたにあるまい。それに、げつそりするまで腹も空く。

白河の雨の夜ふけに、鳴立つて蛙が売る、卯の花の影を添へた、うまさうな饂飩は何うもやめられない。

「洗つてさへくれゝば可いのだが、さし当り……然うだ、此方の容器を持つて買はう。」

其処で、バスケツトを開けた。

中に咲いたやうな……藤紫に、浅黄と群青で、小菊、撫子を優しく染めた友染の袋を解いて、銀の鍋を、園はきら〳〵と取つて出た。

出ると、横ざまに颯と風が添つた。

成るたけ順礼を遠くよけて、——最う人気配に後へ振向けた、銀杏返の影法師について、横障子を裏へ廻つた。店は裏へ行抜けである。

外套は脱いで居た——背中へ、雨も、卯の花も、はら〳〵とかゝつた。

たゝきへ白く散つて居る。

「饂飩を一つ。」

と出しながら、ふと猶予つたのは、手が一つ、自分の他に、柔かく持添へて居るやうだつたからである。——否、其の人の袖のしのばるゝ友染の袋さへ、汽車の中に預けて来たのに——

「此へおくれ。」

銀杏返は赤ら顔で、白粉を濃くして居た。

駅員は最う見えなかつた。其の順礼のお盥髪さへ、此方に背き、早やうしろを見せて、びしや〳〵と行く処を——（見なくとも可いのに）気にすると、恰も油さしがうつ伏せに鉄の底を覗く、かんてらの火の上へ、ぼやりと影を沈めて、大な鼠のやうに乗つて消えた。

駅員が黒く、すら〳〵と、雨の雫の彼方此方。

五

他には数うるほどの乗客もなさゝうな、余り寂しさに、——夏

の夜の我家を戸外から覗くやうに――恁う上下を見渡すと、可なりの寄席ほどにむら〳〵と込む室も、さあ、二つぐらゐはあつたらう。……

園の隣なる車は、づゝと長く通つた青い室で、人数は其処も少ない。が、しかし二十人ぐらゐは乗つて居た。……但し其も、廻燈籠の燈が消えて、雨に破れて、寂然と静まつた影に過ぎない。

左右を見定めて、鍋を片手に乗らうとすると、青森行――二等室と、例の青に白く抜いた札の他に、踏壇に附着いたわきに、一枚思懸けない 真新い木札が掛つて居る……

臨時運転特別車

但し試用一回限り。

「おや〳〵……」

園は一寸猶予つた。

成程、空きに空いた上にも、寝起にこんな自由なのは珍らしいと思つた。席を片側へ十五ぐらゐ一杯に劃つた、たゞ両側に成つて居て、居ながらだと楽々と肘が掛けられる。脇息と言ふ態がある。シイトの薄萌黄の――最も古ぼけては居たが――天鵞絨の劃を、コチンと窓へ上げると、紳士の作法にありなしは別問題だが、いゝ頃合の枕に成る。

「まてよ……」

衣絵さんが此辺を旅行した時の車と言ふのを、話の次手に聞いたのが――寸分違はぬ的切此だ……

「待てよ。」

無論、婿がねと一所で、其は一等室はあつたかも知れない。が、乗心の模様も、色合も、いま見て思ふのと全く同じである。

「――臨時運転特別車。但し試用――一回限り……」

と二行に最一度読みながら、つひ、銀の鍋を片袖で覆ふて入つた。

饂飩を庇つたのではない。

唯、席に着くと、袖から散つたか、あの枝からこぼれたか、鍋の蓋に、颯と卯の花が掛つて居て、華奢な細い蕊が、下のぬくもりに、恁う、雪が溶けるやうな薄い息を戦がせる。

其の雪より白く、透通る胸に、すや〳〵と息を引いた、肺を病むだ美女の臨終の状が、歴々と、あはれ、苦しいむなさきの、襟の乱れたのさへ偲ばるゝではないか。

はつと下に置くと、はづみで白い花片は、ぱらりと、藤色の地の友染にこぼれたが、こぼれた上へ、園は尚ほ密と手を当てゝ蓋を傾けた。

蓋のほの暖いのに、ひやりとした。

火に掛けて煮ようとする鍋の上へ、少くとも其の花片は置けなかつたからである。

気が着くと、茶の外套氏は形もない。ドキリとした。

が、例の大鞄が、其のまゝ網棚にふん反返つて、下に皺びた空気枕が仰向いたのに、牛乳の壜が白い首で寄添つて、何と……、添寝をしようかとする形で居る。

徳利が化けた遊女と云ふ容子だが、其の窓へ、紅を刷いたら、恐らく露西亜の辻占であらう。

では、汽車の中に一人踞つて、真夜中の雨の下に、鍋で饂飩を煮る形は何だ？ ……

説明も形容も何もない――燐寸を摺ると否や、アルコールに火をつけるのであるから、言句もない。……発と朱が底へ漲ると、銀を

蔽ふて、三脚の火が七つに分れて、青く、忽ち、薄紫に、藍を投げて軽く煽つた。

ドカリ――洗面所の方なる、扉へ立つた、茶色な顔が、ひよいと立留つてぐいと見込むと、茶の外套で恁う、肩を斜に寄つたと思ふと、……件の牛乳の壜を引攫ふが早いか――声を掛ける間も何もなかつた――茶革の靴で、どか〳〵と降りて行く。

跫音乱れて、スツ〳〵と擦れつゝ、響きつゝ、駅員の驚破事あり気な顔が二つ、帽子の堅い廂を籠めて、園の居る窓をむづかしく覗込むだ。

其の二人が苦笑した。

顔が両方へ、背中合せに分れたと思ふと、笛が鳴つた。

園は惘然とした。

「あゝ、分つた。」

狐が馬にも乗らないで、那須野ヶ原を二本松へ飛抜けた怪しいのが、車内で焼酎火を燃すのである。

此が、少なからず茶の外套氏を驚かして、渠をして駅員に急を告げしめたものに相違ない。

と思ひながら、四辺を見た。

※したが誰も居ない。

「あゝ……心細いなあ――」

が、その中はまだよかつた、……汽車は夜とともに更けて行き、夜は汽車とゝもに沈むのに、少時すると、また洗面所の扉から、ひよいと顔を出して覗いた列車ボーイが、やがて、すた〳〵と入つて来ると、棚を視め、席を窺ひ、大鞄と、空気枕を、手際よく取つて担いで、アルコールの青い火を、靴で半輪に廻つて、出て行くとて――

「御病気ですか。」

園は大真面目で、

「いゝえ。」

「はあ。」

と首をねぢつて、腰をふりつゝ去つた。

此でまた、汽車半分、否、室一つ我ばかりを残して、樺太まで引攫はれるやうな気がしたのである。

「狂人だと思ふんだ。」

げそりと、胸をけづられたやうに思つた。

「勝手にしろ。」

自棄に投げる足も、しかし、すぼまつて、園は寒いよりも悚気とした。

しかしながら……此を見れば気も狂はう。死んだやうな夜気のなかに、凝つて、ひとり活きて、卯の花をかけた友染は、被衣をもるゝ袖に似て、ひら〳〵と青く、其の紫に、芍薬か、牡丹か、包まれた銀の鍋も、チチと沸くのが氷の裂けるやうに響いて、ふきこぼるゝ泡は卯の花を乱した。

青空文庫情報

底本：「新編　泉鏡花集　第十巻」岩波書店
　　2004（平成16）年4月23日第1刷発行
底本の親本：「新柳集」春陽堂
　　1922（大正11）年1月1日
初出：「国本　第一巻第七号」国本社
　　1921（大正10）年7月1日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※表題は底本では、「銀鼎《ぎんかなえ》」となっています。
※初出時の署名は「泉鏡花」です。
※「銀杏返」に対するルビの「いてふがへし」と「ゐてふがへし」と「ゐてうがへし」の混在は、底本通りです。
※「硝子窓」に対するルビの「ガラスまど」と「がらすまど」の混在は、底本通りです。
※「襟」に対するルビの「えり」と「ゑり」の混在は、底本通りです。
※「入」に対するルビの「はひ」と「はい」の混在は、底本通りです。
※「帽子」に対するルビの「ぼうし」と「ぼうし」の混在は、底本通りです。
※「灯《ひ》」と「燈《ひ》」の混在は、底本通りです。

入力：日根敏晶
校正：門田裕志
2016年9月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀鼎

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/